

高校一年の春。僕は一目で、持てる感情の何もかもを奪われた。

上質な絹糸を丁寧に寄り合わせて作ったような美しい髪。小さいけれど真っ赤な唇に、それと絶妙なコントラストを成している白く透き通った肌は、軽く触れただけでもたちまちその整った形を崩してしまいそうだった。

少女は朝の、同じ電車の同じ車両に僕と同じ駅から乗り、同じ駅で降りる。何とはなしに行き先がたまたま同じだから、僕は無知な魚のように、少女の揺れる長いおさげに釣られてすぐ後ろを歩く。少女はその容貌と服装から考へるに、駅近くにある私立小学校に通つてているようだった。

改札を出ると、少女はまっすぐ駅の出口へと向かって行く。遠のく小さな背中を見つめながら、僕は次の乗り換え先のホームが出口とは真逆の方向にあることを少し恨んだ。

少女とはそれから毎日のように顔を合わせた。いつの間にか鞄に下げられた名札から、少女の学年や名前を覚えてしまっていた。朝は少女に会いたくて、少し早起きをしては決まつた電車に乗るのが日課になつていて。テスト期間中だつたり行事があつたりして早く帰れる平日には、帰りも鉢合わせる事がたまにあつた。

たびたび父親と思われる中年の優男が、少女の隣に立つていた。少女は駅の狭いエレベーターの中で甘いミルクの香りをまき散らしながら、頬をわずかに紅潮させて男の耳に唇を寄せ、何かを囁くのだった。

少女はいつも座つて本を読んでいた。自分の頭と同じか、それより大きいような分厚い単行本をむき出しの膝に乗せ、細長くも幼さの残る指でページをめくる。その繰り返される動作のひとつひとつがぜんまい仕掛けの玩具みたいで、店先のショーウィンドウに飾られた高価な人形でも眺めているような気分になつた。

初めて少女の声を聞いたのは、高校二年の秋口の事であった。直前に迫つた文化祭の準備を終え、少し遅くなつてしまつた帰りにため息を吐きながら、ようやく最寄りの駅で電車を降りたところだった。

そこでは大きな荷物をいくつも抱えた老婆が立ちすくみ、改札が詰まつて人だかりを作つていた。駅員は事務室の奥に引っ込んでしまつて、異変には気付かない。

駅の改札は二つあるため、普段ならばこれくらい気にも留めずにもう一つを使つてさつさと家路につくはずの僕であつたが、老婆の傍らに困り顔で佇む少女の姿を見つけた時、気付けば小走りになつて老婆に駆け寄つていた。

「あれ」と僕を見上げて少女が指さす先では、老婆の両手いっぱいにぶら下げた鞄のうちの一つが改札機の隙間に引っ掛かっている。少女は既に改札を出てしまつており、引っ掛けた鞄を取つてやろうにも手が届かなかつたようだ。

老婆が何とか改札を通り終えた事を確認してから、僕も駅の外に出る。まともに聞いた

少女の声なんて専ら最初の二文字くらいのもので、老婆が去つてからは言葉を交わすどころか目もろくに合わさず、少女はさつさと踵を返して歩き去つてしまつた。

駅の中央出口を抜け、頭上に敷かれた線路の下をくぐり、日も暮れてすっかり暗くなつてしまつた細い路地へ入つていく。少女の向かつた方角は僕の住む住宅街とは全くの逆方面である。線路を隔てた向こう側にはこれといった大きな店や施設もほとんどなく、申し訳程度に立てられたまばらな街灯が、ジージーと不気味な音を立てながら切れかけた白熱球の余命を浪費するのみであつた。そんな場所に小学生が寄り道をするとは思えない。しかし本当にまつすぐ帰宅するつもりなのだろうか、あんなに閑散とした薄暗い路地を一人で通つて。

好奇心に抗えなかつた僕は一定の距離を保ちつつ、少女の後ろを付いていく事にした。ああついにやつてしまつたとストーカーまがいの行為に心地よい背徳感を覚えながら、頭上に伸びた線路を見上げる。

僕はこの近くに住んでしばらくになるが、線路の向こう側に足を踏み入れたことは未だほとんどない。単純に寂れていて用がないという理由以外にも、やはり土地 자체が纏つている空氣に不気味な違和感を抱いていた部分もある。

少女の入つていつた路地を通り抜けてホテル街と化した大通りに出ると、遠巻きに揺れる長いお下げが目に入った。闇に包まれた路地と大通りで光るネオンとのコントラストに顔をしかめながらも、どんどん人気のない場所へ歩を進める少女の後を追う。

そこから十数分ほど歩いて、小さな神社に入ったところで少女を見失つてしまつた。こんな辺鄙な神社に一体何の用だろうか。それともまさかこんな場所に住んでいるのだろうか。

さまざま憶測に頭を悩ませながら、朱いペンキのはげかけた鳥居をくぐつて、少女の消えた方へ進む。神社の敷地内には石畳が広範囲に渡つて広がり、その周囲には木々が生い茂つて、日の落ちた暗い道に更なる影を作つてゐる。境内に出ると三狐神の遣いが二匹、磨くだけ磨かれて申し訳程度に祀られているのがやけに目についた。

結局その晩、再び少女の姿を見る事はなく、この頃から自分の大学受験に向けた早朝学習が盛んになつたせいで、例の電車に乗る機会も減つてしまい、その日を境にしばらく少女と顔を合わせることもなくなつた。

件の少女が僕の日常から姿を消して一年余りの月日が経過した。大学生になつた僕は、付属の中学にそのまま進学した少女と再会を果たすことになる。

午前中に固まつた講義を終えて復路の電車に乗り込んだ時、車内のソファに座る、前回見た時よりもいくらか伸びたお下げがふと視界に入つた。

陶器のような白さと焼き菓子の内側みたいな柔らかさを併せ持つていた肌は、この三年

間でいつそう透明度と艶を増し、見るからに滑らかな頬はほんのりと桜色に上気している。

僕の記憶が正しければ、彼女は現在中学に入学したばかりのはずである。ところが彼女の身に着けている制服や持ち物は、そんな真新しいイメージとは裏腹にボロボロであった。ボロボロの制服を身に纏つた美しい少女というギャップに本能的なめまいを覚えた僕をよそに、とうの本人は事もなげな様子でところどころ革の破けた鞄から分厚い単行本を取り出し、漂白されたページに長い睫毛の影を落とす。かつて、少女の日焼けを知らない腿に沈み込んでしまいそうなほど大きく見えた本は、今や軽々と彼女の片腕に支えられ、彼女にしか伝わらない距離感でその体内に刻み付けられた文字を吐き出しているのだった。電車はいくつめかわからない駅を興味もなさそうに通り過ぎ、僕と少女と、何人かの乗客を揺らす。

僕は十数か月前に一度聞いたきりの、ビードロを擦り合わせたような幼さの残る声を何度も何度も頭の中で反芻しながら、紙をめくる少女の白い指をじっと見つめる。目を凝らせば、その指にはいくつもの細かい傷が認められた。

電車が最寄り駅に到着して少女が立ち上がり、糸の解れたしわくちやのスカートを翻して歩き出す。

ヨレヨレになつた革靴を引きずるように歩いている割には、かなりしつかりした足取りできびきびと進んでいる。僕はいつかもうしたように、大した考えもなしに少女の後をつけた。

線路をくぐり、路地を抜け、大通りを横切つて神社に入る。やはり彼女はここに住んでいるのだろうか。

まだ明るい分、以前来た時ほどの不安や違和感に襲われることなく、すんなりと境内まで出てこられたが、入り口に伸びる石階段を上つている途中でまたもや少女の姿を見失つてしまつた。

神社の入り口から境内までは一本道になつており、少女が石畳の脇に生い茂る木々の植え込みにでも隠れない限り見失うことなどなさそうだ。こつそり付いてきたことに勘付かれてしまつたのだろうか。顔見知りとはいえ、見ず知らずの女の子を付け回すのは流石にまずかつたなど今更になつて少し反省した。

そろそろ帰るかと振り返つたその時、僕は茂みの間になんとも異様な光景を認める。

少女は孤独だった。見目の美しさはときに、自分へ向かう鋭利な凶器となり得る。

両親ともに目鼻立ちちは整つている方ではあつたが、それでも少女の美しさは別格とうたわれ、幼いころから彼女を欲望の渦巻く醜い世界へと容赦なく放り出した。

漆の滝のようにまっすぐに伸びる黒髪は、少女が保育園に入るころから徐々に周囲の注目を浴びる種となり、同年代の男たちは少女の気を引きたい一心でその髪を力いっぱい引

つ張った。また、それと対比をなすような真珠の肌は、卑しい大人の男たちの手によつて執拗に撫で回された。

屋外で遊ぶための時間は、そのほとんどを人気のない建物の裏で過ごした。若い男性保育士に手を引かれ、物陰へ連れていかれる。そこで少女はズボンを下ろした男の肌に自分の手が無理やり重ねられるところや、男の指がその小さな口の中に押し入つてくるさまを見降ろしては、幼さゆえ明確には言い表すことが出来ない不快感をたしかに抱きながら、声も上げずにひたすら耐えていた。

小学校からは私立大学の付属となつてゐる校舎で、比較的裕福な家庭の子供と過ごすことになつた。

札束を貰つて生きてきたような子供たちは、望めばすぐに手に入る玩具の如く少女を蹂躪した。休み時間が訪れる度に、数人のクラスメイトや上級生が代わる代わる少女を校舎の陰へ呼び出し、いくつもの手や舌が身体の上を無遠慮に這つていく。リコードや体操服は何度買い替えても、数か月ともたずに消えてしまつた。

通学時の電車内では不特定多数の欲に塗れた視線を浴びせられ、いつも逃げ出したくてたまらなかつた。

親は長く少女の置かれている状況を知らなかつたが、不自然な頻度で物を失くして帰つてくる娘を見て粗方の察しがついたのだろう、ある日母から「朝はお父さんが途中まで送つて行つてくれるからね」と妙に優しく声をかけられた。ただし今更送迎がついたところで、校内で起こつてゐる問題に対しても何の解決にもならないし、既に父親ですらもはや少女の味方ではなくなつてゐるといふことに愚かな母はまだ気付けていない。

男はさつそく次の日から同じ電車に乗り込んできた。道中は不必要なまでに手を繋ぎたがり、込み合うエレベーターの中では無意味に自らの胸へ少女の肩を抱き寄せる。結局は父親という絶好の口実を盾にした厄介な男が少女を取り巻く外の世界に一人増えただけに過ぎなかつた。

通常、ある一定の年齢に満たない幼子は、多くの大人にとつて性欲の対象となり得ない。ならばどうして自分は子供でありながら、大人か子供かに問わらず、さまざまな年齢の男からこのような仕打ちを受けているのだろうと、少女はスカートの中に侵入してくる皺だらけの見知らぬ手を意識の外へ押し出しながら考えた。

こういう日に限つて隣に父はいない。あの男は週に数度、決まつた曜日の朝にだけくつ付いてきた。そして汗ばんだ指の股を娘の綺麗な指に擦りつけ、荒い呼吸を繰り返して臭い息を吐きかけながら「いつてらっしやい」と囁く。そんな父から、自分を取り巻く世間の全てから目を背けたくて、いつしか少女は本の世界へ逃げるようになつた。

本は素晴らしい。この文字が印刷されただけの白い紙束の上には、何もかもがあつた。

平日は学校の図書室に籠ることが極端に増えた。小休憩や昼食時は同じクラスの女子生徒と他愛もない話で笑い、残りの昼休みや放課後は図書室で宿題を済ませたり小説を読んだりしていた。図書室ではほぼ全ての人間が少女に対して無関心だった。皆がそれぞれの

作業に集中しているおかげか、少女が普段外で感じていたような息苦しさはほとんどない。最終下校時刻まで粘りに粘つて、中年の女性司書が柔軟な笑みで追い出してくるまで、少女は頑なに帰ろうとしなかった。

少女の実家は神を祀っている、いわゆる神社である。特に親しい友人もおらず、これといつた習い事もしていない少女は、平日帰宅するとすぐに巫女服へ着替え、境内の掃除を手伝うことが多かった。特に神聖な場とされる本殿や拝殿に立ち入ることは禁じられており、少女は砂利道や石畳、社務所を任せられることがほとんどであった。

お世辞にも訪問者が多いとは言えないこの神社は、父が留守にしている日に限っては少女にとつて心休まる場所となり得た。

たまに訪れる参拝客も顔を伏せて作業に励んでさえいれば、素知らぬ顔で少女の前を通り過ぎ、話しかけられることなど滅多になかった。

中学に上がったその年の初夏、つい先刻脱ぎ捨てたばかりの自分の下着を右手にぶら下げた青年が、石畳を音もなく歩いてくるまでは。

「これ、君のだよね。」

後から思い返すと、僕の一連の言動はどう考えても通報ものだつた。

茂みの中でこれを拾つた時は、正直自分の見たものが信じられなかつた。

いかにも子供が履いていそうな、小さな柄がまばらにプリントされた下着には、その所有者が本来ならば絶対に知らないであろう類の体液が付着していた。

下着の汚れ具合からして、今日ここに置かれたばかりのものに見える。そこから鑑みるにせいぜい付着してから半日以内の時間しか経過していないはずだが、近づいて実際に手に取つてみれば、本当に数時間前まで人の体内にあつたのかと疑いたくなるほどに強烈な悪臭を放つていた。

思わず触つてしまつた手前、これを元の位置に戻して何事もなかつたかのように立ち去るというのも難しい話である。同時に先ほど見たボロボロの制服を身に纏つた彼女の姿も思い出され、やはりただ事ではないなという考えのもと、少女の下着を片手に見失つた持ち主の姿を再び探し始めて例の一言に至つた次第だ。とはいえ、数年に渡つて憧れ続け、一種の神聖視すら覚えていた彼女とのファーストコンタクトが、まさかこんな布切れ一枚から始まつてしまふとは予想だにしなかつた。

少女は一瞬瞠目してから、そただけど鈴をわずかに揺らしたような声で小さく呟いた。「で、どうするんですか。」「何を」「それ」

そのまま持つて帰るおつもりですかと少女は僕の手元を指さした。

「別にいらぬけど……。洗濯してまた使いたいなら返すよ」

「洗濯する気があるなら最初からあんなところに捨てないわ」

そう吐き捨てたかと思えば、彼女はついさっきまで使っていた箒を石畳に転がしてずいと僕の正面まで歩み寄り、大きく丸い目を少し細めて「お久しぶりです」と言つた。

「覚えてたんだ、僕のこと」

「そりやあ毎日あれだけまじまじと見られていたら……。ほら、今日だつて」

そう続けた一言を聞いて、昼間の彼女の服装を思い出した。

「ああ、あれね。その首謀者にやられたんです。」

それ、とは、さつきからずつと僕の鼻腔を犯している臭いの元を指していた。

「教師？」

「日によつてはそうであつたりするけれど、今日のは違う。男子が乱暴して、女子はそれを後ろで見て笑うの」

どうしても私の事が気に入らないみたいで。彼女は愉快さなど欠片も感じさせずただただ平坦に笑つた。

目の前の男は、いつも自分を見ていた。

彼はこの世の人間全てに興味がないような、死んだ魚みたいな濁つた目で毎日を生きていたくせに、どういうわけかその視線は常に少女を捉えていた。

好奇の目に晒されるのにはある程度慣れていだし、ジロジロ見られてたまに後を付けられるくらいなら大した実害もないため男のことはさして気にも留めず放置していた。

そんなことよりも当時の彼女を苦しめていたのは、校内で徐々にエスカレートしつつある同性からの嫌がらせであつた。

小学校も高学年に差し掛かり思春期を迎えた彼女たちは予め打ち合わせしていたかのように悉く、それまでほんんど気にしていなかつた自身と他人との違いというものに苦しみ始める。他者からどう見られているか、その最も重要な要素として真っ先に容姿を挙げたがる彼女たちにとつて、少女の淡麗過ぎる容貌は自らの立ち位置や自信を大きく脅かす存在となり得た。

昔から自分に危害を加える生き物は男だけだと思っていた。幼い頃は仲が良かつた女たちも、学年が上がる毎に少しづつその数を減らし、減つた分だけ少女の世界に敵が増えていく。纏まつた時間のある時にしか向かわなかつた図書室にも、休み時間が来るたび通うようになつた。

ある日少女が図書室を出て授業に戻ると、教室から少女の机と椅子が消えていた。本来自分が座つているべき位置で、無数の足跡がくつきり付いた教科書やプリントが白い花畑のように広がつてゐるのを少女は立つたまま見降ろす。教員が訪れる前の喧騒の中、女王

気取りの女が少女を指差して品のない笑い声を上げた。

ここで一人の男子生徒が立ち上がり、足元に広がる紙を乱雑に纏めて拾い上げた。男子生徒はにやつきを抑えられなかつたような気色悪い笑顔で、それらを手渡しつつもひび割れた唇を少女の耳に寄せる。

「鞄や体操服は俺が守つてあげたからね。放課後いつもの場所に来てくれば、返してあげる」

生温く湿つた息が耳を、首筋を掠める。吐き気と怒りがない交ぜになつたような複雑な感情から叫び出しそうになる衝動を必死に抑えながら、少女はふらつく足取りで教室を後にした。

中学に入つてからはもう少し酷くなるんですよ。毎日上級生に殴られて、何本差し歯になつたことか。と、少女は巫女服姿の尻を石畳に下ろしたまま当時を振り返る。

「血まみれの口の中に生理用品を詰め込まれたことがあります？あれ、吸水力が凄くつて、喉の奥までカラカラにされた時は本気で窒息死するかもつて思つちやいました」

途中から、どうして自分は名前も知らない男相手にこんな話をしているのだろうと疑問に思つたが、いかにも無関心といった様子で相槌を打つ彼を見て、なんとなくその理由を察した気がした。

彼はいつも少女を見ていたが、その視線の先にあつたのは、あくまで電車に偶然乗り合わせた小娘そのものなのであつて、